

< 藤井啓行教授追悼文 > 藤井啓行先生の笑顔とドイツと

著者	佐藤 裕子
雑誌名	独逸文學
巻	39
ページ	26-27
発行年	1995-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018242

藤井啓行先生の笑顔とドイツと

佐藤裕子

藤井先生に初めて指導を受けたのは大学院の前期課程の時であった。その年の入学生が私1人だったこともあり先生のヘッセ授業は研究室で文字どおりマンツーマン、のんびりとした雰囲気の中で行われた。多くのドイツ文学を志すようになる人がそうであるように、私もまた高校時代にヘッセによってドイツ文学を知り、その孤独で賢明で明るく透き通った世界に魅せられた1人である。残念ながら今では研究分野も全く懸け離れたものになってしまったが、今でもヘッセという名前を聞くと思わず耳をそばだててしまう。藤井先生はヘッセを長年研究されてきた先生で、その大きな知識に触れられる授業が私にとって楽しみだったことはいまでもない。

授業はヘッセの音楽についてのエッセイを中心に進められたように思うが、テーマは時折テキストを離れて、ヘッセと妻たちの関係、水彩画のこと、先生ご自身がルガーノにヘッセの息子を訪ねた時のことなど、様々なことに及んだ。わけてもルガーノの話はどうやら先生のお気に入り、先生のホテルにわざわざその息子さんが訪ねて来てくれたこと、そこに連れて来た飼犬のシェパードの名前が Steppenwolf だったことを嬉しそうに相好を崩して話された。あまりにもできた話にこちらも笑うと、先生はさらにクッ、クッと顔を赤く染められて、本当におかしそうに笑われた。藤井先生はドイツ文学に限らずありとあらゆることに興味があるらしく、その中でも噂話や逸話が大好きであられた。そんな話の数々も先生の口から出ると、やんわりと暖かくユーモラスな響きを帯びた。その後ではまた罪の無いいたずらをして共犯者と一緒に笑うようにクッ、クッと声を殺して、それでも心からおかしそうに笑われるのだった。

前期課程を出てデュッセルドルフ大学で日本語を教えるようになった私を先生が夏に2度訪ねてくださったことがある。初めは行ったばかりの年

の88年、2度目は90年であった。88年の夏は中部から北ドイツにかけて雨の多いじめじめした冷たい夏で、ちょうどその年は合研の稲垣美智子さんも訪ねてくださり、3人でデュッセルドルフの市内を歩いて回った。先生はその後北ドイツのフーズムで行われるシュトルム学会に出席されるということであったが、日の射さない夏に辟易していた私が、フーズムは灰色で何も無くて陰鬱な町でしょうと言うと、先生はうなずきながらも「いや、あの寂れた感じがまたいいんだねえ」とぼつりとおっしゃった。私はその様子に大先輩の世代のゲルマニストの神髄や風格に触れた気がした。デュッセルドルフは経済中心の町で、論争の末勝ち取ったハインリッヒ・ハイネの名を冠した大学の歴史も浅く文学者にとってはそう魅力的な町ではないが、藤井先生はラインの塔、ハイネの生家、旧市街などを一步一步何かを確かめるように、そしておもしろそうにゆっくりと歩いて見て回られた。頻繁にドイツに来られて現在の国の状況に接してこられながらも、なおかつ先生は私などがとうてい計り知れないこの国の精神文化に対するひどく純粋な心意気のようなものを、体のどこかにずっと宿しておられるのだと思った。決してそのことを声高に話されることはなかったけれど。

何十年か先、私もこの国の土をああやって一步一步味わうように踏み締めて歩いているだろうか。

夜は駅の近くのいく分さびれた感じのスペイン料理店の薄暗い蝋燭の下でパエリアを囲んだ。フラメンコの実演があると聞いて行ったのだが、その日はフラメンコなどはなく客はまだ私たち3人だけだった。私は少々がっかりしたが、オレンジ色の光の中でひんやりとした白いラインワインのグラスを手にした藤井先生は満足そうに微笑みながら、前菜のチョコレートの菓子を口にされてまた言った。「このほろ苦い味がいいね」。

ここに1枚の写真が残っている。それは藤井先生が2度目にデュッセルドルフに訪ねてくださった折り、その頃ちょうど近くのゲーテ・インスティトゥートに来ていて立ち寄ってくれた呉さんと一緒に、大学の研究室に来られた時に写したものである。藤井先生はその写真の中で、私たちがよく知っているあの笑顔で微笑んでいる。

その笑顔私たちは決して忘れることがない。